



新大石内蔵助の生涯

元禄赤穂義士

中島康夫 著

NPO 法人

忠臣蔵倶楽部 編

誰もが始めて知る元禄事件の真実  
元禄事件には影で動いていた旗本がいた  
作家・脚本家に読んでもらいたい元禄事件

50年にわたる研究成果の決定版です。

元禄事件研究の新たな夜明けです。全て史料に基づく新発見です。

この内容を知らずして何を語らんやです。

これ一冊で、本当の忠臣蔵がわかります。230ページの大作です。

一冊 1,800円、送料 350円。(10冊以上は一冊 1,500円、送料無料で)。

郵便払込用紙に「生涯」と記し、下記へ。発売元中央義士会。

**00130-0-54568 中央義士会**

振込次第発送す。

TEL 048-973-3777 / FAX 048-973-3790



発行人

〒104-0052

東京都中央区月島3-15-9

全義連事務局

TEL 048-973-3777

編集者 中島康夫

ホームページ

忠臣蔵会館

出版・校正・協力

テレビ制作協力

講演・史跡案内

<http://www.chuushingura.net/>

平成二十六年十一月二十二日  
「易水連袂録」  
名古屋で再発見



大石内蔵助の討入りに対する決心は、堀部安兵衛の主張によってやっと決まったものだ、という方々への反論として、「全国義士会連合会 会報第二十八号（平成二十三年十二月）」で「大石内蔵助の内心」という一文を書いた。

この時に使用した史料は、主として大石内蔵助の書状であったが、第三者が残したもつと直接的に気持ちを現している史料があるので、さらに明らかにしたい。

「朝原重榮覚書」（朝原文左衛門日記）と、原惣右衛門の書状である。

### 「朝原重榮覚書」

朝原文左衛門重榮は、浅野長直の姫君の千姫が大石頼母助良重（大石内蔵助良雄の大叔父）に嫁いだ際に、千姫に付いて大石家に入り、頼母助に仕えた。さらに、千姫の子の左兵衛長武が家原浅野家に養子になった時に、共に家原に行き、家原浅野家家臣となった人物である。

その朝原重榮覚書の該当部分を挙げる。

「亡父文左衛門、私へ致物語候ハ、右江戸より帰りかけ、山科内蔵助殿宅へ見廻候以後、申

談度事有之候間、参候様ニ、内蔵助殿御申越二付、山科へ罷越候処、内蔵助殿被申候ハ、存知之通、左兵衛様とは我等従弟之儀、公儀へも相知レ申事二候、然ル処、吉良殿へ鬱憤を散シ候時ハ、自然左兵衛様御存知之趣ニも有之候而ハ、後日御咎メ之程無、心元候間、内蔵助義浪人之内、身持不宜、不行跡之至リ、左兵衛様思召ニ不叶、依之、義絶被仰付候趣之御状可被下旨、密々左兵衛様へ御申上可給候、右之状ハ、拙者江戸へ罷下候節、被遣被下候様ニとの義二御座候由」

『赤穂義士史料（上）』

右文の意味は、

「亡くなった父の文左衛門が、私に話しをしてくれた。江戸から帰る途中で、山科の内蔵助殿のところへ寄ってくれるよう連絡が来た。そこで、内蔵助殿が話すには、知つての通り、私と左兵衛様とは従弟の間柄であることは、公儀も知つている。吉良上野介のところへ討入った時には、後に咎められるだろうから、それは心苦しい。そこで、内蔵助が遊びぼうけて、身持ちが悪く、不行跡甚だしいため、左兵衛様の思召しにも叶わないことから、義絶した、との手紙を出して戴きたい。これを内密に左兵衛様に申し上げ、手紙は私が江戸へ行く時に下さるよう、とのことでした」

朝原重榮覚書は、重榮の嫡男の英政が、重榮の日記を抜粋したものである。したがってこの「内」は、子の英政が父文左衛門重榮から聞いたことを記載している部分である。

重榮は、元禄十五年二月十九日に江戸に向け家

原を出立した。途中、二月二十一日には、大津で吉田忠左衛門と会つてゐる。三月三日に江戸に着き、用事を済ませて三月十五日に帰途につく。

三月二十四日には滋賀瀬田の橋で、参府途中の広島浅野安芸守を見かけ、山科の進藤源四郎の家立ち寄つてゐる。そこで、隣の家の大石内蔵助は浅野安芸守のところへ行つていて留守であることを、瀬尾孫左衛門と会つて知るが、直ぐに大石内蔵助から来てほしい旨の連絡が入り、内蔵助のところへ行くのである。

したがって、重榮と内蔵助が会つたのは、元禄十五年三月二十四か二十五日で、内蔵助はこの時に重榮に語つたのである。

内蔵助が左兵衛のことを従弟といつてゐるのは、実際には叔父に当たるのだが、内蔵助は、祖父の良欽の養子になつてゐるので、建前上は従弟になるため、こういつてゐるのである。

ここで、内蔵助は重要なことを二点いつてゐる。

①吉良上野介に討入ること

②伏見などで遊び呆けていることは、義絶して

もらうための方便『大石内蔵助の生涯 P.63』。既に、元禄十五年の三月には、内蔵助が自ら、討ち入ることを親戚の旗本に打ち明けてゐるし、それによる影響までも考慮してゐるのである。

### 「原惣右衛門の書状」

この頃、堀部安兵衛は、内蔵助に盛んに討入りを催促し、内蔵助とは分かれて、別に討入ることまで考えていた。原惣右衛門も元禄十五年四月までは、安兵衛に同調し、場合によっては、惣右衛

門が頭となって討ち入ることを考えていたのである。

惣右衛門は元禄十五年四月二日付けの書状で、内蔵助とは別に討入る旨を安兵衛に伝えている。

「旧冬噂之様に申達候通に、上方申合之群をば穩密に引きはなれ、可遂宿意と存候。内蔵助殿初其外之上方者共大勢是を除候時は、木挽町御咎めは有之間敷候・・・(途中略) 然らば此人数を弁へ見申候に、拾四五人は可有之と存候」『近世武家思想「堀部武庸筆記」』

惣右衛門は、大石内蔵助らとは隱密に分かれて討入りを実行すべき。内蔵助や上方の者を多く除けば、浅野大学にも迷惑はかかることはないだろうし、人数も、十四五人は集まるだろう、との考えを示している。これに対し、安兵衛は五月三日付けの書状で、惣右衛門の意見は我が意を得たり、七月中には江戸へ来るように、と喜んでい

この時期まで、惣右衛門は安兵衛と同じく討入りを強行する考えであった。安兵衛も惣右衛門も十四五人もいれば討入りは可能との考えであったが、このまま急いで決行していたら悲惨な結果になつていたことが予想される。

惣右衛門はその後考えを変える。五月二十日付けの書状で、自分の考えを安兵衛に伝えている。

「拙者最前之書状とは、ちと存寄之儀も有之申述候、御返答不承候故、若彼状相違不申哉と無心元存候に付、又如斯御座候。且又申進候通之内存、

思召と相違之儀にて、御取あい無之御思慮にて御座候得ば、御尤と存候。其段如何と存る儀も無之候。又了簡叶候はん衆中へ可談候。唯今先広に難申談候故、外へは不申候。各様迄得御意候趣は、兼々申談候処在之故申述候。勿論上方衆存念堅固には承届候。取分久右殿事、妻室息女共に去る頃但州へ指遣候。嫡男主税兩人山科之宅に塾居候。主税当年十五才にて候得ども、年ばひよりはひね申候。今春前髪被執候て、器量能く、何時も同道にて被下合点、其身も成程に志すくやかにみへ候て、珍重存候。身がるふ仕廻候て、今日にも駈下無相違体、此段は感心頼もしく存事に候。拙者儀年内より痛しかと無之、有馬へ致入湯罷帰、さして験気も無御座候」

『近世武家思想「堀部武庸筆記」』

惣右衛門は自分が四月二日に出した書状とは今は考えも違うので、それを伝えるといっているのである。

それは、内蔵助が妻子を但馬に返して並々ならぬ決心であること、長男の主税は元服し、今日にも江戸へ行くに違いないくらいしつかりしていることで、討入りに対する気持ちは固いことが判つたのである。

内蔵助は四月十二日に綿屋善右衛門と共に伊勢神宮を参拜、その直後に妻の理玖と娘のくうを実家の豊岡へ返しているのである。

さらに、惣右衛門は病んでいて、有馬温泉で湯治していたが、今も病気も良くなつてはいないことを伝えている。

惣右衛門は病気によつて弱気になつたせいもある

るだろうが、内蔵助の強い決心を知つて、急いでかつ少人数で討入ることはせず、内蔵助と行動を共にする考えに変わったのである。

惣右衛門からの五月二十日付けの書状が届き、内蔵助宛の六月十五日の書状を書いたところで、武庸筆記は終わっている。安兵衛は、ここまで武庸筆記をまとめたところで、六月十八日に上方に出発するのである。

安兵衛は前年の内蔵助の江戸下向のおり、春には上方へ上ることになつてしたが、来るように、との要請がないので行けないでいた(元禄十五年一月二十六日付 堀部弥兵衛の書状)。それがこの惣右衛門の書状が来たことで、その真意を確かめ、説得し、上方で討入る同志を集めに向かつたのである。

ところが、安兵衛が上方に着いてしばらくすると、大学の広島行きが決定し、浅野家の再興への道が断られた。七月二十八日には円山会議が開かれ、安兵衛も同席した場で正式に討入りが決まるのである。

内蔵助の中では、討入りと浅野大学が人前になること、の二つが同時進行していた。

大学が人前になるための二条件のうちの吉良上野介への幕府による処分が、前年の上野介の隠居によつてなくなり、また、大学の広島行きによつて、浅野家の再興が消えた。これによつて必然的に討入り決行となつたのであつて、安兵衛の頑強な主張によつて決まつたものではないのである。

## 忠臣蔵愛好会の報告

中央義士会理事 柿崎 輝彦

六月十五日「谷中界限の史蹟を訪ねて」と冠し第十二回忠臣蔵愛好会を開催した。

梅雨時ゆえ、天候がいちばんの心配事ではあったものの、当日は晴天に恵まれ、遙々静岡からの参加や義士子孫の方など総勢四十名ほどがJR日暮里駅に集結した。

今回の訪問先は、史実の元禄赤穂事件に限定せず、広義での忠臣蔵関連の史蹟を選定した。

散策ルートは立寄り順に、安立院、谷中霊園内に点在する関係者墓所、観音寺、そして今回の目玉でもある寛永寺特別参拝。勿論、全般を通して中島理事長の解説付きである。

毎度のことながら、関連史蹟前での中島理事長の解説では、一般に知られていない逸話や初めて披露される史実や史料が示され、あらためて元禄事件の深層に触れることができる。今回も説明を聞く参加者の真剣な眼差しが印象的で、多くの方がその内容を書き留めていた。

これらは忠臣蔵愛好会が、一般の歴史探訪や散策とは違い、学術的にも有意義な会であることの証であり、当会の真骨頂である。

これより、今回訪問した史蹟の説明および忠臣蔵

との関わりをご紹介したい。

## 安立院

ここ安立院には、浅野梅堂（長祚）の墓がある。浅野梅堂とは、赤穂浅野家の分家筋である家原浅野家の末裔の一人で、天保三年（一八三二）に十七歳で家督を相続した当主である。幕臣として目付・浦賀奉行・京都町奉行・江戸町奉行などを歴任し激動の幕末に活躍した旗本である。

家原浅野家は、赤穂浅野家初代城主浅野長直の養子長賢が飛地（現兵庫東加東市・加西市周辺）三千五百石を分封され、加東郡家原に新しく興した浅野家である。二代目には大石内蔵助良雄の叔父頼母助の次男長武を養子として迎えており、大石家の血筋も引いている。浅野梅堂については、

平成二十四年（財）中央義士会発行の書籍

『大石頼母助の系譜』とくに浅野梅堂

に詳しく収録されているので参考にされたい。

次に広大な谷中霊園を訪問。

左記の順に忠臣蔵関係者の墓所を巡った。

- 一、長谷川一夫
- 二、山田宗偏
- 三、中村仲蔵
- 四、川上音二郎
- 五、重野安釋
- 六、徳川慶喜

最初に参拝したのは、数多ある「忠臣蔵もの」の中でも大石内蔵助役を代表する俳優長谷川一夫のお墓。大俳優にしては思いのほか小ぢんまりとした墓石が奥ゆかしい。

次は茶人山田宗偏墓碑。山田宗偏は吉良上野介の

茶の師匠千宗旦の高弟で、元禄当時本所に居を構えており上野介とも親交があった。忠臣蔵では、茶道の弟子大高源五（脇屋新兵衛）を通じて吉良邸での茶会情報をもたらしたことで知られている。

その直ぐ後ろ手が、江戸時代に活躍した歌舞伎役者中村仲蔵の墓。初代中村仲蔵は「仮名手本忠臣蔵」五段目の斧定九郎役を当たり役に仕立て、古典落語の演目「淀五郎」でもお馴染みである。

霊園中通り沿いに、明治中期「オッペケペー節」で一世を風靡した川上音二郎の顕彰碑が建っている。かつてはフロックコートを纏い右手にスティックを持つ全身大の銅像が立っていたらしいが、戦中の金属供出で現在は台座だけが残る。

川上音二郎は、明治後期に荒廃していた泉岳寺義士墓域の大改修に尽力した功労者で、境内の「首洗いの井戸」前の玉垣には川上音二郎建立と彫られた石柱が寄進されている。旧義士堂横には墓碑もあり、泉岳寺との深い関係が窺える。

通りを折れ奥へ進むと、日本初の文学博士重野安釋の墓がある。重野安釋は元禄赤穂事件を初めて近代実証史学の立場から検証し、明治二十二年「赤穂義士実話」を著した方である。それ以降、元禄赤穂事件の史実研究が飛躍的に前進していった。寺坂逃亡説については早くから史料を示し論破している。墓所右手には霊園内でも一際大きい顕彰碑が建っている。

最後に第十五代將軍徳川慶喜公墓域を訪問し、谷中霊園を後にした。

## 蓮花山観音寺

谷中霊園から徒歩五分ほどで観音寺に到着。

観音寺六世朝山和尚（利宝）が、義士近松勘六・

奥田貞右衛門と兄弟であった縁から、討入り直前には、近松勘六と親交のあった義士菅谷半之丞や勘六の家僕甚三郎が寄宿し、しばしば密談の場となった。本堂右手には朝山和尚建立の義士供養塔があり、山門前にはそれらを記した案内板が掲げられ、義士所縁の寺院として知られていた。

平成四年、観音寺裏路地に面する築地塀が、台東区「まちかど賞」を受賞したことで、さらにその認知が広まった。築地塀とは泥土を突き固めて作った塀のことで、ここ観音寺の塀はさらに瓦を葺いてあり、江戸風情の残る街角を形成している。

その後、谷中銀座商店街まで移動し、昼食休憩とした。この商店街は、都内でも有名な観光地である「谷根千」を代表する人気スポットで、この日も観光客などで賑わっていた。

#### 東叡山寛永寺

午後からは、徳川將軍家の菩提寺で祈禱寺でもある寛永寺の特別参拝に参加した。

一般予約の方とともに係の先導で厳肅な根本中堂内に案内され、一同座してその時を待った。

暫くして、本日案内役の僧侶に随い般若心経を唱えた。静かに心が浄化されてから、寛永寺の歴史や文化財についての説明を受けた。

本坊須弥壇（しゅみだん）中央の大厨子には、御本尊で重要文化財の葉師如来三尊像、両脇には台東区登録文化財の四天王像や十二神将などが祀られており、貴重な仏像を間近に鑑賞することが出来た。つづいて徳川幕府最後の將軍慶喜公が一時謹慎されていた通称「葵の間」を見学した。

謹慎当時は十二畳半・十畳の二間続きだったが、現在は元々あった大玄関脇からコンパクトに移築

され、十畳・八畳で保存されている。

玄関から外に出て徳川家御霊廟へ向かった。

寛永寺の施設・建物は、先の戦争でほとんどが焼失してしまっただが、戦火を免れ、今でも絢爛豪華な容姿を保つ門が我々を迎えてくれた。

重要文化財の「勅額門」である。門前で徳川家御霊廟に関する詳しい説明を受け、同じく災禍を免れた重要文化財「水盤舎」横から徳川家墓域へと入場した。

はじめに五代將軍綱吉公の常憲院殿御霊廟へと進んだ。以前は徳川將軍家の身内でも参拝は手前に位置する拝殿からであったらしいが、我々は御霊廟手前の中門まで進むことが出来た。その後、八代將軍吉宗公の有特院殿御霊廟、十三代將軍家定公の温恭院殿とその正室篤姫の天璋院殿御霊廟を参拝し特別参拝は終了した。

今回の寛永寺特別参拝は、元禄赤穂事件とは直接関係するものではないが、当寺に眠る時の將軍綱吉公の裁決によつて浅野内匠頭、大石内蔵助等四十七人が切腹している。元禄十四年三月十四日の幕府の判断誤りが、その後多くの犠牲者を生んだといつても過言ではない。

なお、平成二十七年二月一日に、恒例の吉良邸から泉岳寺まで歩く会を開催いたします。それに先立ち、一月二十四日（土）に大石内蔵助らの切腹地を清掃いたしますので、有志はお集まり下さい。詳細は別途ご案内いたします。



谷中霊園で



全員集合



## 吉良邸討入りにまつわる真と偽

テレビディレクター 田中慎一 (会員)

平成二十六年十月二十六日(日)、十三回目となる忠臣蔵愛好会に参加しました。今回は、「討入りの現場となった吉良邸跡周辺に点在する忠臣蔵ゆかりの史跡を巡る」という企画。午後一時、参加者約二十五名がJR両国駅前に集まりました。

最初に向かったのは、墨田区両国三丁目にある吉良邸跡。正式名は本所松坂町公園です。敷地は二十九・五坪でお世辞にも広いとは言えませんが、事件当時の吉良邸は広大で、今の八十六倍、二千五百五十坪もあったそうです。吉良邸跡には、吉良上野介追慕碑、吉良家家臣二十士碑、みしるし洗い井戸、そして吉良上野介義央公座像があります。その座像の前で、中島理事長から討ち入りについてのお話を伺いました。(写真上)

ご承知のとおり、討入りが行われたのは元禄十五年十二月十四日。「寅の上刻」に、浪士達が吉良邸裏門近くの前原伊助宅を出たのは「寅の一

天」と記されていることから、時刻は午前三時過ぎだと推測されます。「一点」は、「一刻(ひととき)」を五つに分けた最初の部分。従って「寅の一天」は、寅の上刻である午前三時から五時を五分にした最初の二十四分を指します。

映画などでは、浪士達が吉良邸の表門で二手に分かれ、大石主税らが裏門に回ります。でもこれは創作だろうとのこと。というのも、前原伊助宅は吉良邸裏門近くにあったため、わざわざ全員で表に向ったとは考えにくく、出発と同時に二隊に分かれたとみるのが自然だからです。

ちなみに前原宅に遅刻して来た人物がいます。堀部弥兵衛です。どうやら、その前の集結場所でお酒を飲んで寝てしまったためだということですから、なんとも大らかなものです。

歌舞伎などでは討入りの際、大石内蔵助が山鹿流陣太鼓を鳴らす場面が有名ですが、これも脚色。おそらく裏門を大槌で打ち壊す音が太鼓のように響いたため、そのような脚色に繋がったと考えられているそうです。

戦いは、吉良家臣十六名が討死(翌日にはさらに四名が死亡)、二十数名が負傷したのに対し、浪士側は近松勘六が池に落ちた時に内股に深手を負い、原惣右衛門らが足を挫くなどの軽傷を負った程度。圧勝した要因は主に三点あげられます。

一つ目は「完全武装」。歌舞伎や映画のように統一された行装ではなかったそうですが、思い思いの鎖帷子(くさりかたびら)を着込み、鎖入りの手甲(てっこう)、帯、脛あて、脚絆(きゃばん)なども身に付けていたそうです。各人が得意とする武器を持ち、大鋸、鉞(まさかり)、玄翁などの大工道具なども備えていたようです。

二つ目は、「人数を多く見せた」こと。例えば「富森隊、三十名かかれ!」「堀部隊五十人突入!」といった具合に声を掛け合い、人数を十倍程に見せたのです。この心理作戦に、吉良家臣はすっかり動揺してしまっただけです。

三つ目は「一向二裏」。これは三人一組となり、一人が正面から戦っている隙に、残りの二人が背後に回り込んで攻撃するという戦法です。完全武装の上で、心理戦でまさり、さらに戦闘隊形も徹底していた浪士達。討入り成功は、大石内蔵助の参謀能力が見事に発揮された結果なのでしょう。

理事長のお話で興味深かったのは、以前この吉良邸跡に設置されていた案内板の地図には、実際の吉良邸跡とは誤った場所が示されていたという話です。その案内板は昭和三十年代後半に作られたもので、吉良邸跡を囲む土塀の東側内面に埋め込まれていたそうです。地図は、区教委や専門家の指導を受けずに制作され、実際の吉良邸より北に五十メートルずれた場所を示していたとのこと。平成六年にこの誤りを見つけたのが中島理事長で、指摘を受けた墨田区教育委員会はすぐに案内板を撤去したそうです。このことは当時の新聞でも取り上げられていて、記事のコピーも頂きました。余談ですが、すぐ近くに「吉良邸ばあきんぐ」というコインパーキングがあると聞きました。理事長が誤りを指摘する前に作ったものなのでしょうか。以前の案内板を基準にすれば、確かにそこは吉良邸跡ですが、実際そこにあったのは本多孫太郎邸。従って事実に基づくならば「本多邸ばあきんぐ」とするのが正解です。

余談ついでにもうひとつ。吉良家の家老だった小林平八郎。「江赤見聞記」によると、討入りの際に「槍を引つぎげ激しく戦い、上野介をよく守ったが、大勢の赤穂浪士と闘ってついに討取られた」と記されている人物です。一説によれば、その平八郎の娘の子供、つまり孫にあたるのが、浮世絵師の葛飾北斎であると



私たちは吉良邸跡を後にし、歩いて二十分程のところにある堅川第二児童公園に向かいました。ここは堀部安兵衛が「長江長左衛門」の変名で道場を開いていた場所です。公園の周りには、「安兵衛公園」と書かれたのぼり旗がたてられていました。それを見た理事長や義士会の方々には驚くことしきり。実は以前から、この公園を「安兵衛公園」としたらいいのではないかと、この趣旨の話を義士会内でしていたそうなのです。せっかくなのでのぼり旗をお借りし、集合写真（写真上）を撮らせて頂きました。実はこの日の参加者の中には、安兵衛の実姉キンの末裔にあたる方もいらっしゃいました。そのタイミングに合わせて「安兵衛公園」となっていたので、驚きもひとしおです。

一行は浪士達と同様、安兵衛道場跡から吉良邸の裏門近くにあった前原伊助宅跡を目標

しました。討入り後、小野寺十内が妻の丹に送った手紙に「吉良邸までは一本道」だったとの記述はあるものの、正確なルートは分からないとのことでした。伊助宅跡からは再び吉良邸周辺を巡り、回向院、そして両国橋へと向かいました。当時の両国橋は、現在より百メートル程南にかかっていたそうです。両国橋のたもとには、何の説明書きもない歌碑（写真左）があります。

「日の恩や忽（たちま）ち砕く厚氷（あつごおり）」  
 作者は、「子葉」という雅号を持ち、俳諧にも通じていた大高源五。「太陽のお蔭で、積年の厚く張った氷がたちまち融けました」。つまり、「お蔭さまで無事本懐をとげ、積年の恨みをすっかり晴らすことができました」と歌っているのです。恩は、吉良邸の隣の屋敷が吉良家への助太刀をせず、通報もせずに見守っていてくれた事を指すとも言われているようです。



話はそれますが、私が忠臣蔵に興味をもったのは六年前、史実における赤穂事件を題材にしたテレビ番組制作に携わったのがきっかけでした。その中で、義士の手紙から当時の様子や心境を読み解く放送回がありました。取り上げたのは、大石内蔵助の手紙、小野寺十内と丹の手紙、そして三村次郎左衛門の手紙です。

中でも印象に残ったのが次郎左衛門の手紙でした。年老いた母をひとり赤穂に残してきた次郎左衛門。討入りに参加することを強く望みながらも、母の行く末を按じる内容の手紙を書いています。また、討入り後に母に宛てた手紙では、「討入りでは裏門を一番に打ち破って入った」ことや「泉岳寺への引き揚げの際には、大石内蔵助に呼ばれて大いに褒められたこと」などが自慢気に書かれてありました。勝手にそんな人物像を思い描き、四十七士の中でも特に感情移入してしまった記憶があります。そんな私としては、次郎左衛門が大槌を振り上げた吉良邸裏門跡（写真左）は、なんとも感慨深い気持ちになる場所でした。

今回の史跡巡りを通して感じたのは、吉良邸討入りは、歌舞伎や映画の劇的な脚色がとりわけ強いということです。四十七人が揃いの陣羽織を着て、雪の降る中を吉良邸に向かい、表門で二隊に分かれ、陣太鼓が鳴り響く中戦いを繰り広げる…。それは確かに魅力的です。でもそれはそれ。史実に沿った討入りを知ることも重要で、かつ面白いことだと改めて感じました。

またいつか、赤穂事件の史実を探る番組を作りたいとも感じました。その際は理事長始め会員の方々にも助言を頂きたいと存じます。この度は、貴重な催しを企画して頂き、誠にありがとうございました。



# 第11回忠臣蔵通2級検定試験問題

## [申込方法]

### ・ 解答用紙の請求

検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第11回2級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXをお願い致します。また、メールでも受け付けております。折り返し解答用紙をお送り致します。

宛先 〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403

NPO法人 忠臣蔵倶楽部

TEL/FAX 03-3630-1927

メール office@chuushingura.jp

### ・ 受験料と振込先

2級の受験料は2000円です。振り込みで受験申込となります。

郵便局の青色の払込取扱票で下記へお振り込みください。

NPO法人 忠臣蔵倶楽部 00190-0-346038

### ・ 解答の送付

解答はFAXで下記へお送りください。郵送の場合は、上記のNPO法人忠臣蔵倶楽部へお送りください。

FAX 048-973-3790

### ・ 合否は11月になってからお知らせ致します。

## [注意事項]

- ・ 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ・ ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- ・ 試験問題を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- ・ 記入問題については、解答用紙以外に別紙を添付していただいても結構です。
- ・ 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- ・ 最終提出日は、平成27年10月末日です。

平成26年12月

第1問	吉良上野介が本所へ移ることにより、前住者の松平登之助はどこへ移らされたのでしょうか。 ①浅草                      ②上野                      ③四ッ谷                      ④日比谷
第2問	「義士帖」という資料がありますが、この資料集は、どこのお宅に伝わった資料をまとめたものなのでしょうか。



第 3 問	大石内蔵助は、浅野家平穩の折り、よく藩医に診察を受けていたようですが、どこが一番悪かったのでしょうか。 ①血圧                      ②胃腸                      ③頭痛                      ④腰痛
第 4 問	堀部安兵衛が討入りに持参した刀が現在上野の東京国立博物館にありますが、刀に刃こぼれがありません。なぜでしょうか。
第 5 問	土屋主税の諱の正しいものはどれでしょうか。 ①道直                      ②達直                      ③遠直                      ④満直
第 6 問	松之廊下事件で、浅野内匠頭が抜刀直前、着座しておりましたが、なぜ座っているのでしょうか。
第 7 問	松之廊下事件によって、浅野内匠頭の代役として戸田能登守が選ばれますが、それまで能登守は何の役をしていたのでしょうか。
第 8 問	討入り集合場所の 3カ所に集まる前、米沢町の堀部弥兵衛宅で酒宴を挙げますが、この集合の本当の目的は何でしょうか。
第 9 問	吉良邸への討入りを知り、土屋主税は庭に出てきますが、手には何を持っていたでしょうか。 ①刀                      ②弓                      ③長刀                      ④さすまた
第 10 問	討入りを「江戸中の手柄」とたたえた方はどなたでしょうか。
第 11 問	元禄事件関係で、「野生」とは何のことでしょう。
第 12 問	元禄 14 年 3 月 14 日に、勅使方は既に江戸城へ入られ、2 回休息しております。その 2 つの部屋はどこでしょうか。 [                      ] と [                      ]
第 13 問	切り付けられた吉良上野介のため、栗崎道有が召し出されますが、その呼び出し状を書いた方はどなたでしょうか。
第 14 問	寺坂吉右衛門の妻は「せん」といいますが、もう一人「せん」という方が、元禄事件の関係者でおります。どなたでしょうか。

第 15 問	俗に「斉藤文書」といわれている史料集は現在どこの施設が保管しているでしょうか
第 16 問	寺坂吉右衛門の妻「せん」は、吉右衛門が討入り後どこで再会したでしょうか。 ①京都                      ②亀山                      ③村上                      ④刈谷
第 17 問	四十七士の母親で、公然と松之廊下事件の幕府の判決を批判した方がおります。どなたの母親でしょうか。
第 18 問	大石内蔵助の残した「去年以来志浅深働次第」の真書を見ることはできるのでしょうか。見られるとしたらどこにあるのでしょうか。
第 19 問	下記 2 名の義士の氏名を漢字に直して下さい。 おおたかげんご                      [                      ] いそがいじゅうろうざえもん                      [                      ]
第 20 問	「文公」とはどなたのことでしょうか。元禄事件の関係者です。
第 21 問	大石内蔵助の母の名は「クマ」といいます。では、妻リクの母の名前はなんというのでしょうか。
第 22 問	大石内蔵助の誕生日をご存じでしたら書いて下さい。
第 23 問	安場家に伝わる「大石内蔵助良雄切腹之図」では省略されて描かれていないものがあります。他の切腹図と比較して何が省略されているのでしょうか。
第 24 問	「 <sup>はげ</sup> 櫓の木」の逸話と関連する方はどなたでしょう。四十七士の内から選んで下さい。
第 25 問	写本であるがゆえに、写した方が自分なりの表題を付ける訳ですが、元は一つの書物なのに一番多くの違う表題がついている義士関係者の書物は何でしょう。正しい表題を書いて下さい。

第 26 問	大石内蔵助が小柄な体格ではないかといわれておりますが、そのことを示すある一つの経緯（いきさつ）を簡単に書いて下さい。（木像でない答えを求めます）
第 27 問	義士片岡源五右衛門と親戚関係にあった義士を下記から選んで下さい。 ①礒貝十郎左衛門      ②吉田忠左衛門      ③前原伊助      ④武林唯七
第 28 問	大石内蔵助と親戚関係にある義士を下記から選んで下さい。 ①奥田孫太夫      ②不破数右衛門      ③堀部弥兵衛      ④木村岡右衛門
第 29 問	原惣右衛門と親戚関係にある義士を下記より選んで下さい。 ①勝田新左衛門      ②吉田忠左衛門      ③寺坂吉右衛門      ④三村次郎左衛門
第 30 問	「易水連袂録」は天野弥五右衛門が書いていたのでは、という冊子が中央義士会から出版されましたが、あなたはどのように思いますか。もし天野弥五右衛門としたら、何が決め手と思われませんか。天野弥五右衛門ではないとお考えの方は、その理由を書いて下さい。

- なるべく期限ギリギリまで努力してご提出下さい。
- 答えが不明の問題もございます。その場合、不明もしくは不知と書いて下さい。
- 文章で答える問題はなるべく短く簡潔にお答え下さい。解答にならない分かりきっていることは書かないのがコツです。
- 採点が△印の場合もありますが、その場合は△が2つで1問正解とします。
- 中央義士会の過去の出版物でも誤記はありますので充分確認の上、解答して下さい。

全国義士会連合会加盟団体

豊岡義士会	笠間義士会	大坂義士会	赤穂義士顕彰会	赤穂義士会
忠臣蔵倶楽部	中央義士会	北海道義士会	京都山科義士会	京都義士会

**中央義士会 理事**

**静岡支部長 遠藤 信夫**

静岡県富士市在住

**中央義士会古書部**

「忠臣蔵」以外の古書でも  
喜んで引き取りに伺います。

神田文泉堂（小西）  
〇三三三九四一五三四八

本年も赤穂の皆さん  
剣道・合唱・ロータリー  
青年会議所・その他  
大変お世話になりました

平成堀内組 宮川政士

## 今期中に出版された「忠臣蔵」関係新刊本

書名	編著者	発行所	価格
新大石内蔵助の生涯	中島康夫	NPO法人忠臣蔵倶楽部	1,800円
忠臣蔵の真実 ～赤穂事件と米沢～	米沢市上杉博物館編	米沢市上杉博物館	1,544円
勘三郎伝説	関 容子著	文藝春秋	1,728円
忠臣蔵の本尽くし	赤穂市立歴史博物館編	赤穂市立歴史博物館	1,100円
歴史読本 2014年1月号	歴史読本編集部編	KADOKAWA	1,188円
武士道の名著 ー日本人の精神史ー	山本博文著	中央公論新社(中公新書)	820円
討入り四十九士 ー赤穂浪士を助けた二人の剣豪ー	雲村俊徳著	イースト・プレス	1,620円
戦後「忠臣蔵」映画の全貌	谷川建司著	集英社	2,592円
新兵庫史を歩く 2	NHK神戸放送局編	神戸新聞総合出版センター	1,620円
人をあらく 赤穂浪士と吉良邸討入り	谷口眞子著	吉川弘文館	2,160円
なごみ 2013年12月号	なごみ編集部編	淡交社	864円
東宝 昭和の爆笑喜劇DVDマガジン vol.17 サラリーマン忠臣蔵	日本アート・センター編	講談社	1,635円
忠臣蔵まで ー「喧嘩」から見た日本人ー	野口武彦著	講談社	2,376円
本当は怖い京都の話	倉松知さと著	彩図社	1,296円
実録テレビ時代劇史	能村庸一著	筑摩書房(ちくま文庫)	1,728円
忠臣蔵 第7巻	赤穂市史編さん室編	赤穂市	5,900円 (送料別途)
武庸会百周年記念誌	アミックス編	武庸会百年祭実行委員会	1,000円
大江戸剣豪列伝	田澤拓也著	小学館(小学館新書)	777円
週刊朝日百科 31 新発見!日本の歴史 江戸時代4	若尾政希編	朝日新聞出版	607円
あなたの知らない兵庫県の歴史	山本博文監修	洋泉社(歴史新書)	842円
江戸を読む技法	山本博文著	宝島社(宝島社新書)	810円
週刊 日本の城 No.66	デアゴスティーニ・ジャパン編	デアゴスティーニ	607円
書物の達人 丸谷才一	菅野昭正編	集英社(集英社新書)	756円
文楽手帖	高木秀樹著	KADOKAWA(角川ソフィア文庫)	864円
地図と写真から見える! 江戸・東京 歴史を愉しむ!	南谷果林著	西東社	1,296円
異説忠臣蔵 300年後の真実	池波 麗著	文芸社	648円
忠臣蔵異聞 陰陽四谷怪談	脇坂昌宏著	論創社	2,052円
洋泉社MOOK 武士道と日本人	橋場日月ほか執筆、山本博文監修	洋泉社	853円
フィギュール彩 18 忠臣蔵はなぜ人気があるのか	稲田和浩著	彩流社	1,944円
途中下車で訪ねる駅前の銅像	川口素生著	交通新聞社(交通新聞社新書)	864円
乾蔵人隠密秘録(8) 忠臣蔵秘説	藤井邦夫著	光文社(光文社時代小説文庫)	604円
時代劇ベスト100	春日太一著	光文社(光文社新書)	820円
幕臣伝説 ー史実と噂のはざまー	氏家幹人著	洋泉社(歴史新書y)	1,026円
四十八人目の忠臣	諸田玲子著	集英社(集英社文庫)	950円
大石内蔵助とその一族	赤穂大石神社編	赤穂大石神社	1,000円

- ・市販されていない著書もございます。
- ・一部、再版の冊子も載せてあります。
- ・非売品も含まれております。
- ・その他、ほんの一部だけ元禄事件を扱っている出版物で除外している著書もございます。
- ・この一年間で、この他に出版された忠臣蔵物、あるいは元禄事件関係の書物をご存じの方は、ご教授下さい。
- ・本頁に関して、赤穂市教育委員会生涯学習課小野真一氏の協力を得ました。